

みどりの杜俳句会

窓際へ寄れば桜の咲く気配

飯野はつ志

日の当る枝より白し山桜

落のたう鉢植にしてみづみづし

西 ツル

前山の桜庭に出振り仰ぐ

紙雛官女のそばに飾りけり

木元 弘子

手作りの雛菓子届きくるみ味

落の花茎の伸びけり山ふもと

谷内 真里

落のたう少し見ぬ間に花となる

道の辺のたんぽぽ日毎茎長くる

野口利江子

強風の空にしなひて木々芽吹く

仕事場の窓うす紅や花ふぶき

小林 和幸

通り路やとろろ葵の畑に咲く

この辺とさがし当てたり落のたう

岡部富美子

雛壇を際立て高き金屏風

人参の種蒔き藁を被せけり

初雁 功子

畑の隅まん丸に出て落のたう

夕空に綿虫の舞い飛び去らず

関口 侑子

春の朝窓辺に明るさ増しにけり

花守のテント募金の箱のあり

土屋 厚子

桜草手入れとどかぬ草の中

水際にとどまりながら花筏

山田 美子

春の雨明け方の足痛みつつ

鈴木 啓子

白石短歌会

コロナなどどこ吹く風と花は咲く

人もつられてそれを見に行く

渡邊美枝子

小苗より植へて四十年の八重椿

タカラズミは今年の花の季

坂本 美江

ひな祭りの歌も何処から聞こえて

日差しも伸びて春の来たれり

白石 礼子

散りいそぐ桜花びら手のひらに

九十寿を迎え余生の侘びし

渡邊阿里子



人権シリーズ

『生きる勇気と喜びを』

379

「自分が差別されて初めて、ハッと気が付く。」そう教わったことがあります。胸に刺さる言葉でした。誰しも経験のあることかもしれないが、差別は、他人ごとではなく、自分自身の問題でもあるのです。

人は、食べ物があれば、それで生きていける、という訳ではありません。「自分が愛されている、人から大切にされている」、そう実感した時に、初めて生きる勇気が湧いてくるのです。そして、喜んで生きていくことができるのです。

生まれた以上、「喜んで生きていける、生きる勇気が湧いてくる」、そうでなくてはならないのに、現実を見ると、必ずしもそうではありません。それとは裏腹に、差別され冷酷に扱われる、という現実が歴史的にもそして現在もたくさんあります。

時の権力者の人民統治のための手段として、差別的身分として固定され、そして人間扱いされなかった人たちの苦悩・悲しみは、はかり知ることができません。そして、こうした典型的な差別に限らず高齢者、女性、児童、障がい者等に対する差別は、枚挙にいとまがありません。

ひるがえって、もう一度、考えてみたいと思うのです。私たちは、健康で全てが順風満帆にことが運んでいるときは良いでしょう。しかし、「今日は人の身、明日は我が身」と言われるように、誰しもいつか高齢者になり、そしていつ障がい者になるか分かりません。高齢者、障がい者、男性、女性、児童等がいるのが、当たり前前の社会であり、それで社会は成り立っているのです。

全ての人が人として尊重され、そして愛される社会でなければ安心して生きていくことはできないのではないのでしょうか。

東秩父村民生・児童委員 関根 勇夫